

変貌する聖地 —メッカ・メディーナとビジョン2030—



JCCME サウジアラビア総代表 富岡 幸喜

昨年末から今年の初めにかけて、約10年ぶりでメッカ、メディーナの両都市を訪問した。1980年代後半から聖モスクとその周辺の再開発が休みなく続くこの両都市は、サウジでも変化が著しい場所だが、今回の再訪では単なる街並みの変化だけではなく、街の雰囲気が変わりつつあることが感じられた。本稿では、そのような両都市の最近の変貌ぶりを、ビジョン2030に示された「ハッジ・ウムラ体験改善プログラム (Enriching the Hajj and Umrah Experience Program)」とあわせて紹介したい。

二聖地メッカ・メディーナ¹の重要性

イスラーム発祥の地メッカにはカーバ神殿とそれを取り巻く聖モスク (Al-Masjid Al-



メッカの巡礼宿(左, 2005年5月撮影)。15年ほど前までは聖モスクに隣接してこのような巡礼宿があったが、現在は再開発により全て取り壊され、近代的なホテルに変わった(右, 2018年11月撮影)。小店舗はホテルの地階等にできたショッピングモールに移転して営業を続けている。

1 イスラームでは、メッカが第一、メディーナが第二の聖地とされている。第三の聖地は、預言者が「夜の旅 (Al-'Isrā')」をして訪れ、そこから「昇天 (Al- Mi'rāj)」したとされるエルサレムである。シーア派では、ナジャフやカルバラーも聖地と見做されているが、スンニー派では前述の3都市のみが聖地であり、このうち宗教行為として規定された巡礼の目的地となるのはメッカだけである。

Harām)がある。ムスリムが礼拝を行う際には必ずカーバ神殿の方向を向く。また、メッカはハッジ、ウムラと呼ばれるイスラームの巡礼の地でもある。一方、メディーナは、預言者ムハンマドがメッカでの迫害を逃れ、最初のイスラーム共同体を築いた場所であり、預言者の墓や預言者モスク (Al-Masjid An-Nabawi) がある。メディーナへの訪問はズィヤーラ (訪問) と呼ばれ、イスラーム法で定める巡礼とは明確に区別されているが、巡礼ツアーではメディーナ訪問も日程に組み込まれているのが普通である。

サウジアラビア国王が「二聖モスクの守護者 (Custodian of the Two Holy Mosques²)」という敬称で呼ばれることから明らかなとおり、サウジアラビアにとって、この二聖モスクのあるメッカ、メディーナの両都市は特別な意味を持っている。サウジがイスラーム世界の盟主を自認できるのも、イスラーム協力機構や世界イスラーム連盟などのイスラーム系国際組織の多くがサウジアラビアに本部を置くのもこの両都市の存在ゆえであり、サウジのソフトパワーの源泉となっている。

しかし、同時に世界中のムスリムに対して、聖地の管理者として巡礼の円滑な運営に責任を負ったり、イスラームの盟主であるがゆえに求められる行動規範に、外交政策や内政が制約を受けたりといった、この国にとって負担となっている面もある。例えば、海外からの観光客誘致を謳っても、「イスラームの盟主」という自他の認識がある限り、イスラームで明確に規定された禁忌—例えば飲酒—の解禁にまで踏み込むのは難しい。

ビジョン2030における聖地・巡礼の位置づけ

そのような二つの側面を持つ聖地の存在を、サウジの将来像の中で改めて明確に意義付けたのがビジョン2030である。

2016年に発表されたビジョン2030の「はしがき」の中で、ムハンマド皇太子はビジョンの3本柱³を①アラブ・イスラーム世界の中心、②グローバルな投資大国、③3大陸を結ぶ交通の拠点としたうえで、第1の柱について次のとおり述べている。

「私たちのビジョンにおける第1の柱は、サウジアラビアがアラブおよびイスラーム世界の中心にあるということです。全能の神アッラーはこの地に、石油よりも誇るべき貴重なものを授けてくださいました。イスラーム教の3大聖地のうち、メッカとメディーナの2つを有するサウジアラビアは地球で最も神聖なる場所「二聖モスク」と称され、また数百万人のイスラーム教徒が礼拝を行う方角 (アラビア語で「キブラ」) であるカーバ神殿を擁する聖

2 この敬称はサラディンやオスマン帝国の歴代スルタンなどが用いてきた由緒あるものだが、サウド家では第5代のファハド国王 (在位:1982-2005) が初めて名乗り、現在のサルマーン国王も受け継いでいる。

3 ここで「柱」と訳された表現はアラビア語の原文では、「我々の成功の要因 (عامل نجاحنا)」となっており、「柱」という抽象的な表現よりは明確で強い意味を持っている。

なる地として知られています⁴]

つまり、ビジョンを成功に導く第一の要因は、石油などではなく二聖地の存在ゆえに、サウジがイスラームの世界の中心たりうることである、と述べているのである。現実をさておき、建国の経緯からも、イスラームを統治の基本原則とするこの国の方針は、ビジョン2030においても変わらないということであろう⁵。

また、後段では、アッラーから与えられた使命として、「世界中のイスラーム教徒が聖地を訪問できるよう、国家として全力を尽します」と述べている。

具体的には、ビジョンの第一の主題⁶「活気ある社会」において、「イスラームの価値および国家アイデンティティの強化」を大目標として示し、その下位の目標として「ウムラ巡礼者に向けたサービスの向上」を掲げており、公共交通機関の整備、二聖モスクの拡張、宿泊施設等の整備、諸手続きの電子化などを通じ、巡礼体験の質を向上させるとしている。

数値目標としては2015年に年間800万人であったウムラ巡礼者を2020年までに1,500万人、2030年までに3,000万人に増やすとし、世界最高水準のイスラーム博物館の建設なども計画されている。

ビジョン2030における他の目標と同様、巡礼についても Vision Realization Program の一つとして「ハッジ・ウムラ体験改善プログラム」が策定されることが決まっている⁷。その内容については現時点で公表されていないが、ハッジ・ウムラ省のウェブサイト⁸には



オスマン帝国が敷設したヒジャーズ鉄道（1908年開業）のマディーナ駅（2019年2月撮影）。サウジは旧宗主国であるオスマン帝国の遺跡保存には冷淡で、メッカのアジュヤード城など既に破壊されたものも多い。マディーナ駅も2006年にヒジャーズ鉄道博物館としてオープンするまでは放置されていた。最近では古い町並みなども観光資源として意識され、商業化が進んでいる。

4 http://www.aii-t.org/PDF/SVpdf_jp.pdf サウジアラビア「ビジョン2030」（日本語版）p.6

5 ただし、「はしがき」の後半部分で、ビジョンで目指す方向性を「他者に受け入れられる中庸なイスラーム」と述べており、女性の運転や映画館を禁止するような、厳格で排他的と批判されてきた従来の原理主義的イスラーム（所謂「ワッハブ主義」）とは一線を画すことを明確にしている。同 p.7

6 ビジョン2030の主題は3つあり、他の2つは「盛況な経済」と「野心的な国家」

7 <https://vision2030.gov.sa/en> Vision Realization Programs Overview

8 ハッジ・ウムラ省 HP：<http://vro.haj.gov.sa/Arabic/Pages/default.aspx>

プログラムの目的が記載されており、要すれば次の3点にまとめられる。

- 1) 可能な限りたくさんのムスリムに、より完璧な形でハッジ・ウムラ・ズィヤーラの機会を提供すること。
- 2) 二聖モスク、観光地・文化施設等を整備し、巡礼中およびその前後の期間を含め、より良いサービスを提供することで、巡礼体験の質の向上を図ること。
- 3) 民間経済の発展に積極的な役割を果たせるよう民間部門との関係を明確化すること。

詳細はプログラムの公表を待たなければならないが、当国で宗教行事を語る文脈の中で、「サービスの向上」、「イスラーム観光開発」、「民間ビジネス」等の表現が出てくること自体が従来にない大きな変化である。

イスラームの巡礼ーハッジ・ウムラ・ズィヤーラ

ここでイスラームの巡礼について簡単に説明しておきたい。

【ハッジ】

➤ ハッジとは：

イスラームの五行⁹の一つで、条件¹⁰を満たしたムスリムが一生に1度は行わなければならない義務で、「定められた時期にメッカの定められた場所で定められた儀式を行うこと」と定義されている。

➤ 一般的なハッジの方法：

- ① イスラーム暦10月1日から12月8日までの間に、所定の場所 (miqāt)¹¹まで行き、巡礼着¹²に着替えて禁忌の状態¹³に入り、メッカの聖モスクに赴く。
- ② カーバ神殿の周囲を反時計回りに7周する。(タワーフ)
- ③ カーバ神殿に隣接するサファとマルワの丘の間を7回(3往復半)行き来する。(サアイ)
- ④ 12月8日の昼までに聖モスクの東方、6kmにあるミナーの谷に行き、一晩を過

9 他の4つは、①信仰告白、②定められた礼拝、③ラマダン月の断食、④定められた喜捨。

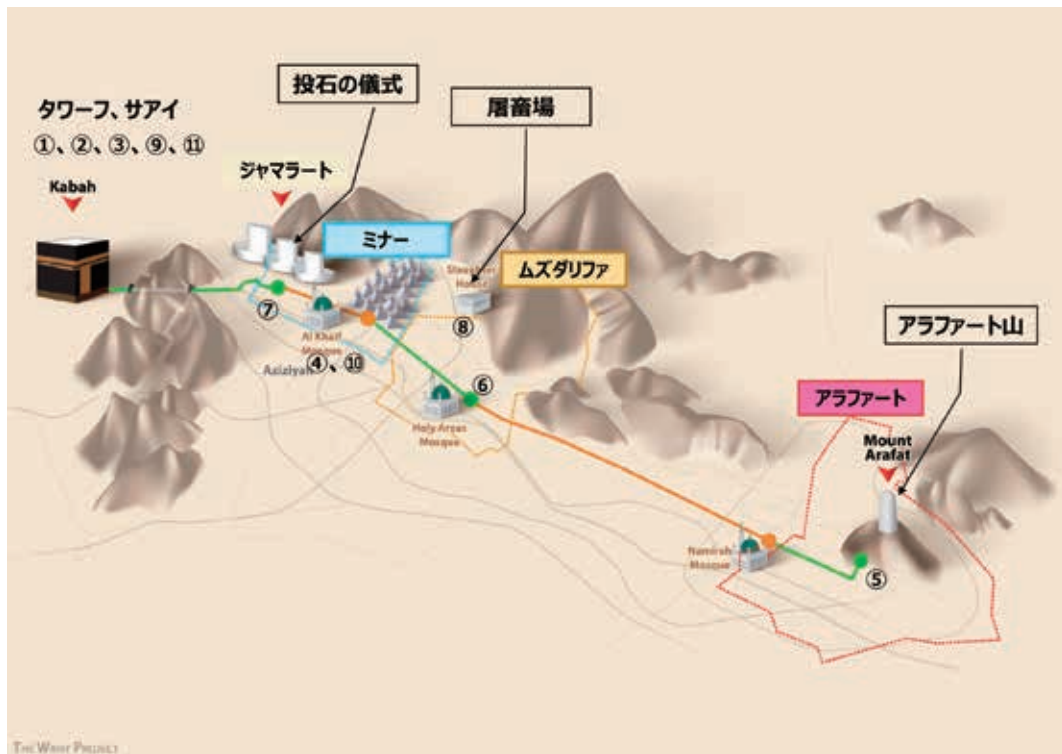
10 主な条件は、①成人であること、②精神的に正常であること、③自由身分であること、④メッカまでの旅行が可能であること、⑤負債がないこと。

11 Miqātは巡礼者の出発地によって異なる。例えば、リヤドなどのアラビア半島中央部を通過してメッカに向かう場合、メッカの東、約75kmにあるQran Al-Manazilがこれに当たる。巡礼者は禁忌の状態にならずにこの地点を超えることができない。巡礼者がドバイ等から飛行機でジェッタに向かう場合、機内でMiqātの上空を通過してしまうので、予め巡礼着に着替えて搭乗する巡礼者も多い。

12 男性の巡礼着は染色してない、縫い目のない2枚の布で、一枚を腰に巻き、一枚を上半身に纏う。また、頭部を覆うものや靴は禁じられるので、無帽、サンダル姿となる。女性は特に服装規定がなく、イスラーム的な通常の服を巡礼着とするが、顔を隠すベールは禁止される。

13 禁忌の状態に入ると、性的な接触や殺生、香水、頭髪や体毛の除去、男性の場合は、通常の服装などが禁止される。これらの禁止事項は、巡礼の主要行事が終わり、禁忌の状態を解くまで継続する。

ハッジ関係図¹⁴



ごす。

- ⑤ 12月9日の夜明けとともにミナーの東方、11kmにあるアラファートまで行き、日没まで過ごす。
- ⑥ 日没とともにアラファートを出発し、ミナーとの中間地点にあるムズダリファで一泊する。
- ⑦ 12月10日、ミナーに戻り、ジャマラートと呼ばれる場所で投石の儀式を行う。
- ⑧ 犠牲を捧げた後、剃髪（男性のみ）または散髪を行い、禁忌の状態を解き、巡礼着から通常の服装に着替える。
- ⑨ カーバ神殿に戻り、タワーフとサイイ（前述②と③）を行う。
- ⑩ 12月11, 12, 13日はミナーに残り、



アラファート山の山頂に建つ白い石柱。(2018年11月撮影) かつてはハッジ期間以外は閑散としていたが、現在は大勢の人が訪れるようになった。石柱に掲げられた看板にはビジョン2030のロゴも見える。

14 <https://thewahproject.com/page/2/> を基に作成。

ジャマラートで投石の儀式を行う。

- ⑪ 12月13日、メッカに戻る。13日以降の任意の日にタワーフをしてメッカを離れる。

【ウムラ】

ウムラは、ハッジの儀式のうち、タワーフとサアイのみを行うもので、ハッジ同様、巡礼着を着て禁忌の状態になり、儀式終了後に剃髪をして、禁忌を解き終了となる。基本的に時期の制約はなく¹⁵、年間を通していつでも行うことができ、アラファート等の巡礼地に行く必要もないので、半日もあれば十分終わらせることができる。

ウムラの法的判断については、スンニー派主要4法学派でも義務か推奨行為かで意見が分かれるが、サウジで支配的なハンバリー派は、これを義務としている。他の法学派も強く推奨される行為としているので、一般的なムスリムであれば、いつかはウムラをしたいと望んでいるのが普通である。

【ズィヤーラ】

ズィヤーラとは、アラビア語で「訪問」という意味で、ここでは、マディーナにある預言者モスクおよび預言者の墓を訪問し、祈りをささげることを意味する。ハッジやウムラの儀式の一部ではないが、預言者モスクでの礼拝は他のモスクでの礼拝より千倍功德があるとされ、初代および2代目カリフの墓や初期イスラーム史の旧跡も多いため、特に海外からサウジを訪れる巡礼者は必ずメディーナを訪問する。



マディーナの観光名所を周回する2階建て観光バス(2019年2月撮影)。24時間乗り降り自由でSAR80。バスは男女の席の区分もなく、従来のサウジ宗教界の発想では考えられない変化。

15 実務的にはハッジの時期と重なるイスラーム暦10~12月は、ハッジ巡礼者が優先されるので、ウムラ用のビザは発給されない。しかし、国内巡礼者にビザの制約はないし、ハッジ巡礼者はハッジの前にウムラを行うので、この期間ウムラが全く行われぬわけではない。

ハッジ・ウムラ巡礼者数の推移

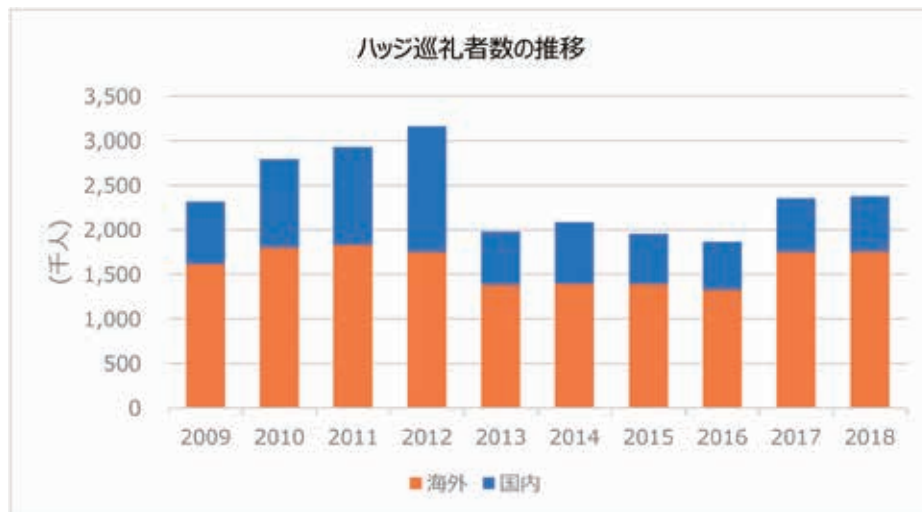
【ハッジ巡礼者の推移】

サウジ統計局が発表した2018年のハッジ巡礼者¹⁶は、合計237万人で、海外からの巡礼者が176万人（74%）、国内の巡礼者が61万人（26%）である。過去10年間の巡礼者数の推移を見ると、国内巡礼者が141万人（45%）と特出して多かった2012年に316万人を記録しているが、過去2年間は230万人台に留まっており、2010-12年の3年間に比べると平均で約20%減少している。（グラフ「ハッジ巡礼者数の推移¹⁷」参照）

前述のとおり、ハッジでは行うべき儀式のタイミングが厳密に定められているため、巡礼者が特定の場所に集中することになり、毎年新たな混雑防止策が講じられてはいるが、現在行われている聖モスクの拡張工事が完了するまで、安全なハッジのためには300万人を超える巡礼者の受け入れは困難と思われる¹⁸。

国内外を問わず、ハッジをするためにはサウジ政府の許可が必要で、ハッジ期間中は許可証のない者の聖域への立ち入りが厳しく制限されるため、ハッジ巡礼者数は厳密なコントロールが可能である。海外からの巡礼者数は二国間の合意事項で削減が難しいため、大きな変動はなく過去10年間は平均160万人台で推移している。その分、近年では国内の巡礼者が一時期より大幅に削減されており60万人台に留まっている。

ハッジのピークは長めに見積もってもイスラーム暦12月の1ヵ月弱程度¹⁹であり、アラファートやムズダリファのモスクなどは1年に1日しか使用されない。宿泊施設やバスな



16 https://www.stats.gov.sa/sites/default/files/hajj_1439_ar.pdf

17 前出資料より筆者作成。

18 ハッジ巡礼者の数値目標はビジョン2030でも明確にされていないが、一部資料では400万人となっている。

19 国内巡礼者の85%が12月7、8日の両日にメッカに入っている。遅くとも13日には巡礼の主要行事は終わるので、大多数の国内巡礼者のメッカ滞在期間は1週間程度に過ぎない。一方、海外からの巡礼者については、20日から25日くらいのパッケージツアーが多く、メッカに15-20日、残りをメディーナで過ごすのが一般的である。

どの交通機関もピーク時に合わせて用意するとなると、残りの期間は設備を遊ばせておくことになってしまう。実際、現状では立地の悪い巡礼宿などは巡礼期の1, 2ヵ月しか営業していない。閑散期対策を講じない限りハッジ関連ビジネスへの投資は頭打ちとなるだろう。ビジョン2030で数値目標を掲げてウムラ巡礼者の増加が強調されているのは、このような閑散期対策も大きな理由の一つである。

【ウムラ巡礼者数の推移】

国内居住者はウムラに際して許可を得る必要がない。ウムラは基本的にいつでも行うことができ、半日もあれば終わらせることができるので、国内のウムラ巡礼者数の正確な把握は困難である。

一方、サウジ国外に住む外国人がウムラを行う場合、ウムラ用のビザ取得が必要となるので、実数が把握できる。ハッジ・ウムラ省によると、1438年（2016/10-2017/9）に発給されたウムラビザは675万件で10年前の1429年（2008/1-12）の338万件から倍増しており、特にここ数年の伸びが著しい²⁰。

サウジ統計局のウムラ統計1438年（2016/10-2017/9）²¹によれば、同年のウムラ巡礼者は国外からの巡礼者が653万人（34.2%）、国内が1,255万人（65.8%）で、計1,908万人²²となり、2020年の目標であった1,500万人をすでに超えている。

国外のウムラ巡礼者が国内の半分以下に留まるのは、巡礼期間と重なるイスラーム暦の10-12月はウムラビザが発給されないことも理由の一つで、巡礼直後の1月も極端に巡礼者が少なく、実質的にウムラ巡礼者が海外から訪れるのは2月から9月までの8ヵ月間に限られている。

国外巡礼者のうち53%が14~20日間滞在し、3週間以上滞在する巡礼者も30%程度いる。前述のとおり、ウムラの儀式自体は半日もあれば終わってしまうので、残りの日々を聖モスクでの礼拝と買い物や旧跡巡りなどで過ごすことになる。

対照的に国内の巡礼者は、6割弱が日帰り、3日以上滞在する巡礼者は2割程度しかない。要するに国内居住者にとってウムラは敷居の高いものではなく、気が向いた時に気軽にできる宗教行為の一つということになる。

20 <http://www.haj.gov.sa/arabic/HajjUmrahMagazine/archive/Pages/1439.aspx> なお、この数字はビザの発給件数であり、ビザ取得時とウムラ実施時期のずれもあり。当該期間の巡礼者の実数とは一致しない。

21 <https://www.stats.gov.sa/ar/6032>

22 国内巡礼者数は聞き取り調査による推計、国外は入国記録による実数。



Prince Mohammad bin Abdulaziz (マディーナ) 国際空港 (2018年12月撮影)
トルコの TVA Airports とサウジ企業グループによるサウジ初の民営化空港。巡礼者の約25%
が入国の際にこの空港を利用する。ジェッダ空港が約6割で、残りは陸路等で入国となる。

ハッジ・ウムラの経済効果

ハッジやウムラの経済効果を試算した信頼できる資料は残念ながら見当たらない。しかし、ハッジ、ウムラをあわせ海外から800万人以上、国内から1,300万人以上が両都市を訪れるだけでも相当な経済効果があると考えてよいだろう。

前出の資料によれば、8割近くの国内ウムラ巡礼者は一日あたり SAR100～300 (3千～9千円) で過ごすが、SAR600 (1.8万円) 以上を支出する層も1割近くいる。日本でも巡礼ツアーは、販売されており、ハッジが25日で60万円弱、ウムラ10日で25万円程度である。

また、聖モスクや巡礼地の拡張整備、メディーナ-メッカを結ぶ高速鉄道、メッカ・メトロ等の公共交通機関、不動産開



マディーナのクルアーン (コーラン) 博物館で展示物の説明をする職員(2019年2月撮影)。巡礼ビジネスは宗教系大学の卒業生の受け皿となっている。

発などの複数の大型プロジェクトが動き出しおり、メッカ・メディーナの両市からは建設用のクレーンが消えることがないと言われている。

雇用に関して言えば、2017年のハッジではサービス業を中心に287千人が関連業務に従事した。より重要な点は、巡礼関連ビジネスが、失業率の高い宗教系大学の卒業生の受け皿になっている点である。メッカの聖モスクだけで353名の正規職員²³がおり、その多くが宗教系大学の卒業生だと言われている。

ハッジ・ウムラのビジネスチャンス

メッカ、メディーナはムスリム以外の立ち入りが禁止されているし、ハッジやウムラが日本人にあまり縁のないイスラームという宗教に由来することから、巡礼関連ビジネスへの参入に積極的な日本企業は少ない。しかし、メディーナの聖域には非ムスリムであっても許可を得ればビジネス目的で入ることができるし、現実には多くの非イスラーム圏の企業が巡礼関係のビジネスに参入している²⁴。

また、都市交通システム、AIを利用した群衆管理や大量の巡礼者への効率的なケータリング、給水、ごみ処理など、日本企業の強みが生かせる分野も少なくないと思う。今後の日本企業の巡礼ビジネスへの参入に期待したい。



(左) 再開発の進むメディーナの預言者モスクの西側 (2019年2月撮影)。(右) メッカのジャバル・ウムラ開発プロジェクト (2018年11月撮影)

23 間接雇用の職員・作業員は約2,700名。

24 但し、メッカ・メディーナでの不動産投資、ハッジ・ウムラのガイド業への外資参入は制限されている。